聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

第９章　エルサレム教会における祈り②

祈るというたゆまぬ訓練

迫害に直面した際の祈り

祈るというたゆまぬ訓練

祈りの重要性に疑いが投げかけられることは、クリスチャンの間ではほとんどありません。しかし、そのような言葉上の同意としばしば矛盾するのは、祈ることそのものについてのたゆまぬ訓練が欠けているということです。初代教会の弟子たちはたえず祈りに専心しており、その実践から、しるしと不思議、神の奇跡的なご介入、そして教会の強力な成長が起こっていました（使徒 2:43 参照）。ルカは、弟子たちが神殿に行く途中で奇跡を行うことになった場面を書き記しています（使徒 3:1-8 参照）。**「ペテロとヨハネは午後三時の祈りの時間に宮に上って行った」（使徒 3:1）**。祈りについてのこの簡潔な記述からは、彼らが神殿での祈りに駆り立てられていた、何か特定の重荷を見て取ることはできません。わかるのはただ、彼らが定期的に祈ることを習慣にしていたということです。彼らには、祈りのために神殿という特定の場所があり、午後三時という特定の時間があったのです。

クリスチャンは誰しも、祈りのための特定の時間と場所を持つべきです。しかし、それ以上に重要なのは、神に対する誠実さと意識的な交わりであり、祈りにはこれが込められていなければなりません。過度に厳しく統制された鍛錬は、隷属化を生み出します。それは、毎日、朝九時、午後三時（第九の時）、それに日暮れという三度の祈りの時を確立していたユダヤ共同体が直面していたことでした（歴代誌上 23:30 は日に二回についてしか語っていないが、詩篇 55:17、ダニエル 6 :10 参照）。時間を決めたこのような実践は勧められることですが、時間を設定することによって、行いそのものが単なる形式に陥ったり、敬虔さを他人に見せつけるものに陥ったりしないよう、常に警戒しなければなりません。というのも、定期的な祈りの時において、神との正直で意義深い交わりに取って代われるものなど何も存在しないからです。

特に銘記すべきは、祈りの場所に、ペテロとヨハネが一緒に行っていたということです。結果、彼らはそこで起こった素晴らしい奇跡に共にあずかるところとなりました。私たちはあらためて**「もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます」（マタイ 18:19）**というイエスの教えを思い起こさせられます。明らかに、この二人の間には霊における親密さがあり、それが、祝福された聖なる類の一致を生み、全能なる神の目を引くところとなったのです。

祈りに対するこの簡潔な記述から学べる教訓としては、次のようなものが挙げられます。

① 祈りにおける訓練は、あらゆるクリスチャンにとって非常に大切なものである。
② 祈りのために特定の時間と場所を決めることは、その訓練の一部である。
③ 可能性という扉は、誰かと共に祈る時に開く。

迫害に直面した際の祈り

ペテロとヨハネは、生まれつき足が悪くて歩けなかった男性に素晴らしいいやしをもたらす、神の特別な道具となりました（使徒３章）。ところが、二人の教えや行動に激怒した祭司や宮の守衛長、サドカイ人らは、彼らを投獄してしまいます（使徒 4:1-3）。翌日、聖霊に新たに満たされたペテロは（8 節）、彼ら全員を前に、恐れることなくみことばを語りました。最終的にペテロとヨハネは、当局に脅された後、解放されます。彼らは仲間のクリスチャンたちのところに戻り、二度とイエスの名によって語ったり教えたりしてはならないと祭司長や長老たちから禁止されたことを報告しました。この命令を受けて、初代教会はひざまずき、祈ります。

> これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った。「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。あなたは、聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの父であるダビデの口を通して、こう言われました。「なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしいことを計るのか。地の王たちは立ち上がり、指導者たちは、主とキリストに反抗して、一つに組んだ。」事実、ヘロデとポンテオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民といっしょに、あなたが油をそそがれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らってこの都に集まり、あなたの御手とみこころによって、あらかじめお定めになったことを行いました。主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。御手を伸ばしていやしを行わせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行わせてください。」　彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。（使徒 4:24-31）

このクリスチャンの群れがどのような方法で祈ったかについては記されていません。一人が祈りを導き、他の人々がアーメンと心を合わせるものだったのかもしれませんし、何人かが順番で祈りを導いたのかもしれません。全員が詩篇第２篇を唱和した可能性もあります（使徒 4:25-26 参照）。しかし、実際の進め方がどうあれ、鍵は、彼らの祈りが一致していたことでした。**「神に向かい、声を上げて言った」（24 節）。**その祈りは、自分たちが呼び求めていた神を正しく認識することから始まっています。**「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です」（24 節）**。ここで「主」に用いられている言葉は、他の箇所で用いられているものとは異なります。ここでの言葉は、「主人」「主権的な」あるいは「超越的な権威」という意味のものとなっています。このような認識は、神を宇宙の創造主として称えるものであり、同時に、そのような偉大な神に祈る人々の心に信仰を生み出すものなのです。

迫害が進行中の教会によるこの祈りにおいて、クリスチャンは神の遍在と、自分たちの主に起こったすべてのことを神があらかじめ定めておられたことを認識しています（4:25-28）。イエスの受難と死は、いまだ彼らの思いの中心を占めていました。神が遍在される方であるという知識、そして、あらゆる出来事を完全に支配しておられるという知識は、今日のクリスチャンにとっても、変わらず重要です。神が人生のあらゆる浮き沈みをご存じであり、何を見ても驚かれないということに、私たちは平安を得るのです。神は依然としていと高き方なのであり、全宇宙の主権者として未来を見ておられ、未来を決定しておられるのです。そして、私たちに自由意志を与えてくださり、私たちが自分自身を完全に委ねていいのだということを教えてくださっているのです。29 節になると、この祈りは、神を過去の神として認識するところから離れ、**「主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり」**と、現在の神としても描いています。迫害されたクリスチャンのこの小さな群れは、過去にそのご支配を示された神が現在を支配することもできること、自分たちがそれにもかかわらず直面していた危機をもまた、支配することができるということを知っていたのです。

困難の数々に押しつぶされそうになると、クリスチャンは皆、心脅かされるような時に直面します。しかし、そのような時の心配と祈りは、困難を取り除いてください、妨げてください、というよりは、喜びと自信を持って向き合うための力と解決法を与えてください、というものであるべきです。この初期の一団のキリストの兵士たちにとって、その脅威に対する答えは、退却でも沈黙でもなく、自分たちを脅かす者たちに裁きをもたらしその脅威を止めてくださいという懇願でもありませんでした。彼らは自分たちのメッセージを高らかに叫ぶための大胆さと力を求めて祈ったのです。神が自分たちの状況をご存じであることを知っていた彼らは、勇気と確信をもって人々の反対に直面することができました。私のメッセージを大胆に伝えなさいと使命を与えてくださった神でしたから、自分たちの働きが正当なものであることをしるしと不思議をもって示してくださるよう、彼らは願うことができたのです。**「あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。御手を伸ばしていやしを行わせ、あなたの聖なるしもベイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行わせてください」（使徒 4:29-30）**。奇跡的なみわざの現れは、神がまさに自分たちとともに、また自分たちを通して働いておられることを証しするものであり、自分たちの献身的な努力を神が認めてくださっているのだと、彼らは知っていたのです。

今日にあっても、たとえそれが無味乾燥で、力のない、弁解的な証しであっても、それに対する答えはなお、聖霊の力であり、神からのいやしであり、しるしと不思議の現れの中に示される神の力なのです。私たちは勇気を持ち、そのような力ある証しができるよう、神に願っていかなけなりません。あのペンテコステのしるしが過去のものとされてしまうのを、見過ごしにしてはならないのです。

この初期のクリスチャンの群れの祈りが聞かれたかどうか、結果は明らかです。答えはとても力強いものでした。

①彼らが集まっていたところが揺れ動いた。
②みなが聖霊に満たされた。
③彼らは神のことばを大胆に語った（使徒 4:31）。

イエスが既に**「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます」（使徒 1:8）**と示しておられたように、神の答えは聖霊を通して訪れたのです。この弟子たちはペンテコステの日に聖霊をいただいていました。しかし、その特別な力の満たしは、「新たな満たし、新たな注ぎ、新たな動き」、御霊の力と賜物の「新たな現れ」、御霊の助けに今後も依り頼むことを排除するものではなかったのです。一世紀の弟子たちは、神との頻繁な交わりなくしてクリスチャンとして生き続けることはできませんでした。二十一世紀のクリスチャンも同じです。神は当座の恵みは与えてくださいますが、それを未来のために貯めておく場所はありません。神に従う人々は、神と絶えず交わることを実践しなければならないのです。そのための手段こそ、たゆまぬ、あふれる祈りなのです。

聖霊が来られるとき、人々に見られる反応はふつう、何かを語り出すというものです（ルカ 1:42、使徒 2:4, 4:31,10:46,19:6 を参照）。使徒 4 章 31 節が宣言しているところによれば、聖霊に満たされるとクリスチャンは、それまで祈っていた通りに**（29 節）「神のことばを大胆に語りだした」**とあります。語るという彼らの大胆さが、聖霊に満たされたところから溢れ出るものであったという点は留意すべきです。しるしと不思議を求める願いからではなかったのです。ただし、しるしと不思議が起こったのももちろん、彼らの求めに対する答えとしてでした。それは、大胆に、平易に、公に語られていたみことばを裏づけるものとなりました。しかし、証しにおける大胆さもまた、聖霊のお働きであるのです。

祈りとその結果についての、この注目すべき箇所から学ぶべき教訓は多くあります。

① 迫害や脅威が迫った時には、神を信じる人々に加わり、祈る。
② 祈ることにより、祈りの対象である神の偉大さを告白することで、信仰に力を得る。
③ 神のみことばを自分の置かれた状況に当てはめつつ、それに即して祈る。
④ 迫害や脅威が迫っているからといって、自分の守りや逃避のためだけに祈ることはせず、それらにかかわらず良き働きをすることができるよう祈る。
⑤ 聖霊に十分に満たされるよう、神が自分の器を大きくしてくださるよう祈る。そして、神が奇跡的なしるしによってみことばを裏づけてくださるよう祈る。